特集

2020年 東京オリンピック・パラリンピック 招致に向けて

今年の9月、いよいよ2020年オリンピック・パラリンピック開催都市が決まる。東京での開催は、世界中の人々に東日本大震災からの復興を示す良い機会となり、多くの国民に“夢と感動”をもたらすだろう。しかし、東京開催の最大の課題は「国民支持率」といわれ、今後の世論の盛り上がりが招致の成否を大きく左右する。経済同友会では、「東京オリンピック・パラリンピック招致推進プロジェクト・チーム（PT）（新浪剛史委員長）」を設置し、世論喚起の運動を行っている。今回は、PT発足記念イベント、および新年会員懇談会の様子を掲載する。ロンドンオリンピック金メダリスト他、多くの関係者が参加し、支持拡大を呼び掛けた。

特別セッション　12月21日開催

スポーツの魅力と東京へのオリンピック・パラリンピック招致

—「東京オリンピック・パラリンピック招致推進PT」発足記念—

特別セッションは来賓講演の他、ロンドンオリンピック・パラリンピックのメダリストによるパネル・ディスカッションが行われ、競技にかける熱い思いが語られた。会場には、多くの報道関係者も詰め掛け、招致への強いアピールとなった。また、交流会では猪瀬直樹東京都知事も参加し、東京開催への支持を訴えた。

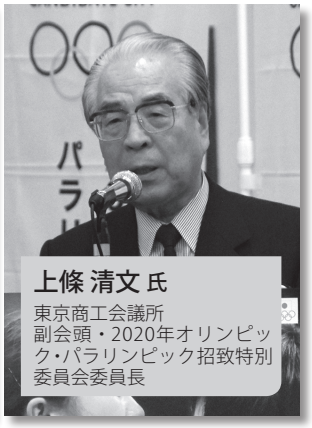
開会挨拶　長谷川代表幹事のファンファーレでにぎやかに開会

長谷川代表幹事が開会挨拶に登壇し、冒頭、1964年東京オリンピックのファンファーレをアカペラで熱唱、会場を沸かせた。当時、高校生だった長谷川代表幹事は、今もその記憶が鮮明に残っていると語った。

今回のPT設置については「新浪剛史副代表幹事の強い熱意とともに、東京に活を入れ、次世代に夢を残すためにもオリンピック・パラリンピック招致に全力を尽くしたい。共に、大いに盛り上げていただきたい」と意気込みを表した。

続く来賓挨拶では、上條清文東京商工会議所副会頭・2020年オリンピック・パラリンピック招致特別委員会委員長が登壇した。経済同友会の東京招致PT発足には大いに期待できるとし、加えて招致については都や招致委員会ばかりでなく政財界をも交えたオールジャパンで進める必要があると訴えた。そして、最大の課題である国民の支持率については「ロンドンオリンピック・パラリンピックや銀座の50万人パレード等を経て、支持率は高まっている。何としても2020年開催を勝ち取るべく、経済同友会とも強く連携し、経済界の立場から招致機運を最高潮に盛り上げていきたい」と語った。

長谷川 閑史
経済同友会
代表幹事


上條 清文 氏
東京商工会議所
副会頭・2020年オリンピック・パラリンピック招致特別委員会委員長

■委員長挨拶

「次の主役は君たちだ」と若い人に伝えたい

新浪 剛史
経済同友会
副代表幹事・東京オリンピック・パラリンピック招致推進PT委員長

これだけたくさんの方に集まっていただいたことに深く感謝する。

東京オリンピック・パラリンピックの開催が、日本にとって上げ潮となる大きなチャンスだと確信する。小売業を生業とする私は、「気の大切さ」を非常に重視している。「若者に元気がない」とよくいわれるが、これほどのチャンスが眼前に広がっているのだ。

これまでも、東京商工会議所の方々は大変な尽力をしてこられた。そしてJOCの方々、選手の方々は、ロンドンでこれだけ大きな感動を与えてくださった。われわれ経済同友会も、一緒になって、招致に尽力したい。

かつて、1964年東京オリンピックの聖火に私も感動した。新幹線もでき、日本は物質文化の栄華を極めたのだと実感した。

しかし、今度のオリンピック・パラリンピックで先進国・日本が示さなくてはならないのは、オールジャパンの団結力、おもてなしに代表される優しさや文化、そして震災復興への感謝である。私は経済同友会を挙げて取り組む一助になれればと思い、委員長を拝命した。今日のセッションは動画共有サービスのUSTREAMでも中継される。若い人に「次の主役は君たちだ」と伝えたい。そして、若い人たちに後世、「先輩たちが一緒になって東京招致をやってくれて、よかった」と喜んでもらえるよう、皆さんと一緒に頑張っていきたい。

■来賓講演

2020年招致に向けて

市原 則之 氏
日本オリンピック委員会（JOC）専務理事
東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会副理事長

2011年、日本体育協会・日本オリンピック委員会は創設100周年を迎えた。スポーツ基本法が制定される中で、スポーツが自発的な運動の楽しみを基調とする人類共通の文化であることを掲げた年でもあった。この年の3月11日に東日本大震災が発生し、多くの方々が被災した。スポーツに携わる私たちは「このようなときにスポーツ活動をしてよいのか」と迷い、ロンドンオリンピック組織委員会では日本の参加を危ぶむ声さえ上がった。

私はこのままでは日本が国力を疑われ、経済にも悪影響を与えると考えた。オリンピック参加は勝敗以上の意義がある。すぐにロンドンへ行き「日本はロンドンオリンピックに最大規模の選手団を派遣する」と組織委員会に伝えた。

ロンドンオリンピックでの日本代表選手団は、過去最多の38のメダルを獲得した。これは選手一人ひとりが「スポーツができる喜び」を真剣に考えた結果だと思う。被災地には多くの選手が訪れ、元気を届けるとともに、逆に被災者の方々から勇気を頂くことも多々あった。メダルは選手の努力の成果ではあるが、同時に皆さんのエールや応援とともに獲得したメダルでもあると感じている。

オリンピック終了後のパレードでは50万人もの方々に集まっていただき、スポーツが持つ力の大きさをあらためて実感することができた。そして、この力で閉塞する日本に貢献し、ぜひとも2020年オリンピック・パラリンピックを東京に招致したい。

開催計画においては、コンパクトな会場配置、そして、豊富な大会運営の実績などをアピールしている。都の全面的なバックアップを受け、政府も超党派の議員連盟を中心にチーム・ジャパンとして招致活動を推し進めている。

1964年東京オリンピックの感動を、再び今の若者に継承するのがわれわれの役目でもある。ぜひ、経済界からも多大なるご支援をお願いしたい。

交流会

猪瀬東京都知事も駆け付け、招致をアピール

交流会は、村田諒太氏（ボクシング・ロンドンオリンピック金メダリスト）の乾杯で始まり、オリンピアン、パラリンピアンと会員が交流を深めた。

また、猪瀬直樹東京都知事も参加し、経済同友会のPTの発足、特別セッションの開催に感謝の意を述べた。そして、オリンピック・パラリンピック招致については「強い意気込みで、世界に対して情報を発信していかなくてはならない。2013年の1月8日、オリンピック招致の立候補ファイルを提出しPR活動が解禁される直後から、ロンドンを訪れて情報発信を行い、広く東京開催をアピールする所存だ。2020年のオリンピック・パラリンピックは東京での開催を招致するが、東日本大震災の復興のためという意識を、多くの日本人が共有していると強く感じている。その実現のためには、経済界の皆さんの力が必要不可欠である。何とぞ、よろしくお願い申し上げる」と語った。

パネル・ディスカッション

ロンドンオリンピック・パラリンピックメダリストが語る

特別セッションの後半は、メダリストによるパネル・ディスカッションが行われた。「スポーツを通じて学んだこと」などをテーマに話し合われた。

パネリスト

村田 諒太 氏	（ボクシング、ロンドンオリンピック金メダリスト）
上田 春佳 氏	（競泳、ロンドンオリンピック銅メダリスト）
木村 敬一 氏	（競泳、ロンドンパラリンピック銀・銅メダリスト）
市原 則之 氏	日本オリンピック委員会（JOC）専務理事 東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会 副理事長

モデレーター

新浪 剛史	経済同友会 副代表幹事 東京オリンピック・パラリンピック招致推進PT委員長

スポーツが教えてくれた仲間の力、目標を持つ力、続ける力

新浪：まずは、メダリストの皆さんに、どんな気持ちでロンドンオリンピック・パラリンピックに臨んだのかをお話しいただければと思います。

木村：前回北京パラリンピックでは5位が最高（100m自由形、100m平泳ぎ）でした。今回は旗手も務めさせていただき、何としてもメダルを獲りたいという気持ちでした。皆さんのご声援に応えることができ、本当にうれしく思っています。

上田：私も北京でメダルが獲れず、何としてもロンドンで獲るという思いで4年間練習してきました。メダルを獲って銀座のパレードに参加させていただいた時には、たくさんの人に勇気を与えることができたのかなという気持ちになりました。

村田：目標としていた金メダルを獲れた結果に、満足しています。44年ぶりのメダル獲得をという期待があって、試合前はしんどかったのですが、今はオリンピックに参加できた喜びを実感しています。

新浪：スポーツを通じて学んだものとは何だったのでしょうか。

木村：北京の時は高校3年生で、ほとんど一人で練習していました。その後、大学に進学して多くの人と練習するようになり、練習効率も上がって一人では出しきれない力を出せることが分かりました。一緒に戦ってくれる仲間の大切さを、強く実感しました。

上田：私は目標を持つことの大切さを学びました。とにかく、気持ちの面であきらめないことです。水泳の競技は最後の15mがしびれるくらいとてもきついので、奥歯をかみしめるぐらいの気持ちで臨んでいます。

村田：私は大学でコーチという立場も務めており、続けることの難しさと素晴らしさをよく感じます。スポーツは途中で逃げてしまうと、キャリアにならない。やり通すことで見えてくるものがあると思います。また、高校の恩師の「ボクシングは人を殴ることで人の痛みを知る」という言葉が今も胸にあります。単なる殴り合いではないボクシングとは何か、そこで人の上に立つというのはどういうことか、を日々考えています。

成熟国・日本での開催は新しいモデルをつくる

新浪：選手村は、どんな雰囲気でしたか。

上田：選手村では、他競技の人とも交流することを心掛けました。ビリヤード台のあるゲームセンターなどもあり、開催前はリラックスできました。

木村：私たちは自身も相手も視覚障がい者なので、普段の交流はあまりないのですが、所属チームには社交的な人が多く、中国やオーストラリアの選手とも会話する機会が持てました。

新浪：競技に対するロンドンの人々の様子はどうだったでしょうか。

木村 敬一 氏
競泳、ロンドンパラリンピック
銀・銅メダリスト

村田：イギリスはすごく盛り上がっていて、歓迎されているムードもあり、とてもいい雰囲気でした。試合後、ハグしてくれるお客さんもいました（笑）。

上田：競泳も、予選からたくさんの観客の方に来ていただきました。スポーツへの関心が高い国だと感じました。自由形で泳いでいると手を振っている様子もよく見えるので、頑張ろうという気持ちになります。

木村：関心の高さはパラリンピックでも同様で、一つの「スポーツ」として見られていました。日本はまだ、障がい者スポーツはリハビリ、健康増進、レクリエーションの一環として捉えられる側面がありますが、ロンドンの人は純粋にスポーツとして楽しんでいる、そう思いました。

村田 諒太 氏
ボクシング、ロンドンオリンピック
金メダリスト

新浪：その意味では、東京のパラリンピックはどうあるべきでしょうか。

木村：やはりたくさんの人に競技会場へと足を運んでもらえることが、私たちの励みになります。メディアの力もお借りしながら、社会の関心を高めていくことが肝心だと思います。

新浪：成熟国・日本での開催では、もっとスポーツとしてのパラリンピックを盛り上げていくべきですね。市原専務理事はどのようにお考えですか。

市原：オリンピック・パラリンピックには二つのタイプがあるのだと思います。これまでは、新興国が国威発揚のために招致し、お金をかけて盛大に行うのが常でした。しかし成熟国家においては、新しいモデルをつくっていかなければなりません。バリアフリーを備え、障がい者の方も含めた集大成のオリンピック・パラリンピックとすべきです。その意味では、北京とロンドンは非常に対照的でした。ボランティアも多数参加したロンドン大会は、「皆のためのオリンピック・パラリンピック」と呼べるものでした。

上田 春佳 氏
競泳、ロンドンオリンピック
銅メダリスト

新浪：国からの支援という点では、いかがですか。

市原：ナショナルトレーニングセンターを作っていただきましたが、まだ練習場が少ない競技もあります。一方で、スポーツ基本法が施行され、トレーニング、栄養、情報分析など多角的にサポートするマルチサポート事業も始まりました。政権交代によるさらなる加速に、期待します。

新浪：日本人は期限を区切られるとすごい力を発揮します。オリンピック・パラリンピックの招致、開催のその日を目指し、頑張りましょう。

質疑応答

Q：オリンピック・パラリンピックのような大きな大会では、アドレナリン（興奮状態）と平常心のバランスをどのように保っているのか？

村田：精神的に弱い面があるので、心理学も勉強しました。成績を残すためには、全力を出し切ること。勝ちたいと思い過ぎずに、勝つためには何をやるのかという点にだけ、焦点を合わせるようにしています。

上田：レース前にしっかりと練習し、自信を持って臨むことをまずは目標にしています。本番では「落ち着け」と自分に言い聞かせて、飛び込んでいます。

木村：僕は50m自由形に一番自信があり、ここで勝ちたいと思い過ぎてしまい、緊張してメダルが獲れませんでした。それで、放心状態になり暴食してしまいました。でも結果、平泳ぎのときには逆にリラックスして臨め、銀メダルを獲ることができました（笑）。勝ちたいという気持ちを抑えて勝つことを、実感できました。

Q：食事およびメンタルケアで気遣っている点、工夫している点は？

上田：競泳は、食事やメンタルは自己管理となっています。女子選手は太りやすいので、自ら気を付けています。一方で、マッサージには4人ほどスタッフの方がいて、肉体面のサポートにとても感謝しています。

村田：ロンドンではマルチサポート・ハウスがあって、ここでは日本食も取れました。メンタルサポートも行っており、すごく助かりました。

木村：一人暮らしをしていて、以前はだいぶ食生活が乱れていました。直前に、国立スポーツ科学センターを利用させていただき、そこできちんと栄養を取ることの大切さを実感しました。

市原：今の点に関連して、パラリンピアンには気の毒な点があります。オリンピアンは文部科学省が管轄する一方、パラリンピアンは厚生労働省の管轄になっており福祉の一環とされるため、サポート体制が異なります。同じレベルの充実したサポートを整える必要があります。

新年会員懇談会　1月28日開催

オリンピアン・パラリンピアンが参加 新年会員懇談会

今年の経済同友会・同友クラブ合同の新年会員懇談会では、竹田恆和JOC会長、ロサンゼルスオリンピック柔道金メダリスト山下泰裕氏が講演し、招致への情熱と道のりを語った。また、12年ロンドン大会で日本国民を歓喜の渦に巻き込んだオリンピアン、パラリンピアンを招いた懇親会も開催した。

竹田 恆和 氏
日本オリンピック委員会（JOC）会長
東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会 理事長

■来賓講演１

2020年招致はラストチャンスである

ロンドンオリンピックにおいては、日本代表選手団は過去最多の38のメダルを獲得した。大会全体を振り返ると、どの会場も熱気にあふれ、そして笑顔にあふれた素晴らしい大会であった。敗者にも大きな声援を送る市民の姿に、成熟した都市が開催するオリンピックであると強く実感した。

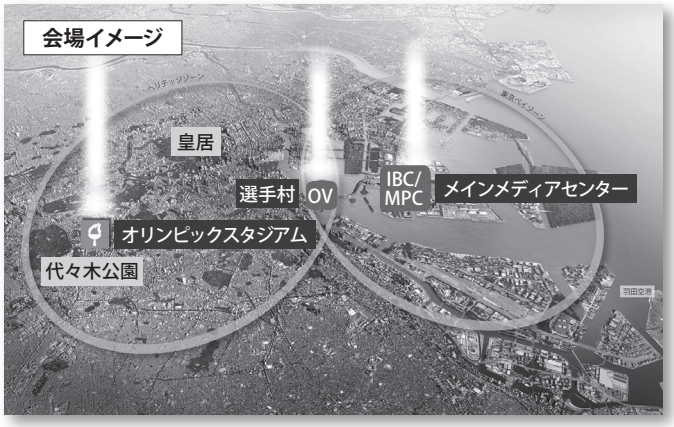
ロンドンオリンピックが残したレガシーは、持続可能性と将来への遺産だ。英国東部地区の再開発によって誕生したオリンピック公園は、今後、英国スポーツの拠点となる。また、スポーツをする子どもたちを増やすための振興策も実施された。

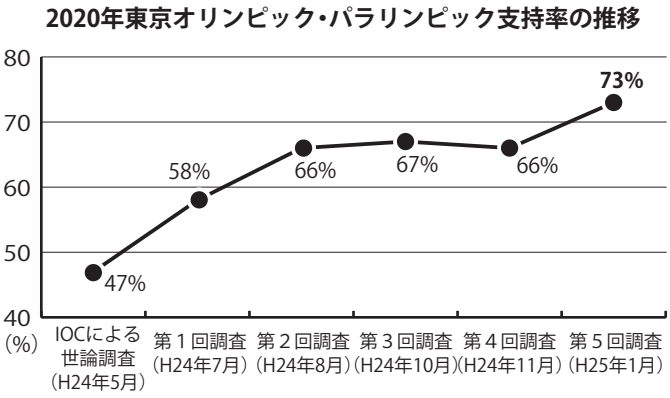
こうしたレガシーを日本にも残すべく、ぜひ東京オリンピック・パラリンピックを実現させたい。前回2016年招致活動の経験をベースに、さらにレベルの高い計画を練り、既に招致活動を開始している。2020年東京開催を実現することで、1964年東京オリンピックの感動を21世紀を担う若者に伝えるとともに、復興した日本の姿と支援をいただいた方々への感謝の気持ちを世界に伝える機会としたい。

開催都市を東京としたのは、IOCが求める条件に最も適合しているからである。インフラやホテルなどが整備され、既存の施設を利用すれば、最小限の費用で開催できる。都は既に4,000億円を用意しており、税制面で都民に影響を与えることもない。逆に3兆円の経済効果、15万人の雇用を生み出すと試算され、これを東北の復興にどう結び付けられるかを考えていきたい。

東京オリンピック・パラリンピックのスローガンは、「今、ニッポンにはこの夢の力が必要だ。」であり、それを実現すべく、安心、安全、そして、確実な大会の開催という三つの約束を世界に掲げていきたい。2016年開催計画からの主な変更点は選手村である。敷地を40％拡大し、そこから8km圏内に28競技会場を用意する。また、国立競技場を改築し、メインスタジアムとする。

もし今回のチャンスを逃すことがあれば、他都市の動向から、日本に今後オリンピック・パラリンピックが来るのは難しくなる。是が非でも、このチャンスを勝ち取りたい。





山下 泰裕 氏
東海大学 副学長
ロサンゼルスオリンピック
金メダリスト

■来賓講演２

オリンピックへの熱き思いを語る

東京オリンピックの感動が私の原点だった

1964年東京オリンピックの際、私は熊本の山中に住む7歳の小学生だった。放課後はテレビの前にかじりつき、日本選手を応援した。重量挙げの三宅義信選手、男子体操、「東洋の魔女」と呼ばれた女子バレー、マラソンの円谷幸吉選手の活躍は今でも印象に残っており、その後の私の人生に非常に大きな影響を与えた。

実はその時はまだ柔道を知らなかった。柔道と出会ったのは小学4年生の頃で、「大変な問題児」だった私には堂々と暴れられるぴったりの競技だった。柔道の激しさに惹かれ、素晴らしい指導者にも恵まれた私には、オリンピック出場のチャンスが3回あった。76年モントリオール、80年モスクワ、84年ロスである。しかし、モントリオールは補欠に終わり、２度目のモスクワは、ソ連のアフガニスタン侵攻で日本は参加をボイコットするに至った。私は「幻のオリンピック選手」の１人になった。

その時、松前重義先生（当時東海大総長）から「モスクワオリンピックを見に行かないか」とのお誘いを受けた。ありがたいお話だったが、私の心には二つの不安があった。一つは「日本がボイコットしたのに行ってはたたかれるのでは」という不安、もう一つは「会場を見た途端無念の思いに駆られるのでは」という不安だ。友人に「心配するな」と励まされた私は、行くことに決めた。

結果、マスコミにたたかれることはなかった。加えて、無念な気持ちも起きなかった。世界の多くの柔道家たちが、私に声をかけてくれた。当時右足腓骨をけがしていた私は、「大丈夫か」と、逆に励まされたのだ。この時初めて、スポーツによる友好親善を肌で感じることができた。すっきりした気持ちで、私はロスを目指すことになった。

オリンピックの頂上決戦で得たフェアプレーの精神

ロスオリンピックでは、やるべきことをやり尽くして、参加したはずだった。しかし2回戦、右ふくらはぎを肉離れしてしまった。右足で勝負してきた私にとっては、深刻なダメージだった。苦しい中をなんとか決勝まで進んだが、佐藤宣践監督が「投げられろ。一本取られなければ負けないから、それからしがみついて勝て」とおっしゃるほど、傷は深刻だった。

しかし予想外の出来事が起きた。決勝の相手は、エジプトのラシュワン選手。開始直後、彼は技を空振りし、その勢いで倒れたのだ。そのまま抑え込み私は勝ったが、それは100回に一度あるかという幸運な勝利だった。

ラシュワン選手は試合後、記者に「なぜ右足を攻めなかった」と突き上げられた。しかし彼はこう答えた。「アラブ人の誇りだ。あのヤマシタに、そんな卑怯なことはできない」と。周囲の人間は皆、一転して拍手を送り、彼はユネスコのフェアプレー賞を受賞した。

オリンピック選手は皆、国の誇りを胸に全力で試合に臨む。徹底的に戦う。しかしひとたび試合を離れると、同じ目標に向かって努力した相手を理解し、尊敬することができる。そうして得た人間関係は、一生の宝となった。

ともあれ私は、オリンピックの表彰台の一番上に立つという夢をかなえることができた。中学2年生の時から、「柔道の強い高校、大学に進み、オリンピックに出たい。オリンピックに出たら、表彰台の一番上でメーンポールに掲げられた日の丸を見ながら、君が代を聞きたい」と、願ってきた。金メダルが欲しいのではなく、日の丸と君が代が夢だった。それは間違いなく、東京オリンピックの時に見たあの感動を追っていたからだった。多くの人の支えと励ましで夢を実現できた自分は、世界で一番幸せな男だと思った。

夢を持つ素晴らしさを訴え日本の素晴らしさを訴える大会に

このように私は、自分の夢を達成するためにオリンピックを戦った。だから金メダルを獲った後が、社会への恩返しの始まりだと思った。

夢を持つこと、持ち続けることの大切さは、どんな世界であっても非常に大きな意味がある。次の世代が夢を持てる社会にしていくことは、われわれ大人の責任だ。

オリンピック・スタジアム外観イメージ図
新国立競技場基本構想国際デザイン・コンクールにおける最優秀賞受賞作品

64年大会の頃、日本は発展途上国そのものだった。しかし、子どもたちの目は輝いていた、夢を持っていた。そういう社会を、われわれはつくらなくてはならない。2020年大会招致を通して、私は子どもたちに夢、明るい笑顔を描ける環境をつくっていきたいと思っている。

そして、スポーツのフェアな精神も訴えていきたい。私が会長を務めている神奈川県体育協会では、「フェアプレーの精神を日常生活でも」を合言葉にしている。スポーツの力で、フェアで思いやりにあふれた世界をつくりたい。

私は06年、柔道を通じた国際交流を行うためのNPO法人「柔道教育ソリダリティー」を設立した。柔道用品の配布や指導者・選手の受け入れ・交流などを通じて、「柔の心、和の心、日本の心」を世界に発信していきたいと考えている。

日本は、もっと自信を持ち、日本の素晴らしさを世界に訴えていくべきだ。英BBCの調査では、日本は「世界に良い影響を与えている国」第1位である。東日本大震災の混乱の中、秩序を乱さず、思いやりの力で復興しようとしている日本。私はオリンピック・パラリンピック招致を通じて、日本の心を世界に知ってもらいたいと思う。

懇親会　オリンピアン パラリンピアンとの交流

左から、上田春佳選手（競泳・ロンドンオリンピック銅メダル）、杉本美香選手（柔道・同オリンピック銀メダル）、田口亜希選手（射撃・同パラリンピック出場）、吉田沙保里選手（レスリング・同オリンピック金メダル）

懇親会は、同友クラブの岩沙弘道理事長の乾杯で始まった。続いてオリンピアン・パラリンピアンが登壇し、新浪剛史東京オリンピック・パラリンピック招致推進PT委員長によるインタビューが行われた。2020年東京大会招致への思いを尋ねたところ、吉田選手からは「国民の皆さまに生で応援していただくチャンス。ぜひ東京で開催してもらいたいし、私も出場したい」と熱い意気込みが語られた。

会場では、障がい者雇用を積極的に進めるスワンベーカリーより、参加者にパンを提供頂いた。新年会員懇談会は、会員とオリンピアン・パラリンピアンとの交流も活発に行われ、笑顔あふれる会合となった。